

1 大学の理念・目的

1 大学の理念・目的

a 現状の説明

近畿大学の創立は大正14年の日本大学専門学校の開校に始まり、法律科、商科および政治科の3科でスタートした。昭和18年には大阪理科大学の設立が認可され、理工系学科が開設された。その後、昭和24年の学制改革に伴い、この2校を母体として統合し、総合された教育・研究機関である新制度の近畿大学として誕生し、今日に至っている。現在では、10学部42学科、11の大学院研究科をもつ西日本有数の総合大学に発展し、これまで、人材の育成の面においても、研究業績の面においても、社会に少なからぬ貢献をしてきた。

本学の教育理念は、昭和24年新制近畿大学の発足にさいして、世耕弘一初代総長が示された「本学における教育の目的は、人に愛され、信頼され、尊敬される人を育成することにある」という言葉に明確に示されている。「人に愛され、信頼され、尊敬される」ためには、その人格に深い根源的な力が備わっていなければならない。他人の心を思いやり、社会に対する深い洞察力があり、自然・環境に対して優しい姿勢をもち、正しい歴史観や世界に広く開かれた視野を持つことによって、はじめて、人に愛され、信頼され、尊敬される人格を養い得ると考えられるからである。つまり、この本学の教育理念は、教養教育、リベラル・エデュケーションの重要性を指摘したものである。

昭和40年、世耕政隆第2代総長はその着任にさいして、「本学は先例にとらわれず自主独往の気概に充ちた未来志向性の総合大学を目指す」という教育理念とその目指すべき方向性を明確に示された。「自主独往の気概に充ちた未来志向」は大学そのものの指向する方向を示す言葉であるが、学生個人のレベルにおいても他人に迎合せず、つねに自己の主体性を失わないことが肝要であり、自主独往の気概とは、このような主体性の確立を教育目標とすることを意味している。

さきに述べたように、本学は、法律学、商学、政治学など文系学科を中心とした日本大学専門学校と、理工学系を中心学科とした大阪理科大学に源を発している。これらはいずれも純理論的な分野よりも、社会への直接的応用を視野においた「実学」に重きをおいて設立されたものである。この実学の精神は、総合大学の形態になった現在でも、教育・研究の両面において綿々と受け継がれて、本学の特徴的な個性を形づくっている。ここで言う「実学」とは決して理論的側面の軽視を意味しているのではなく、社会のニーズを視野においた実践的な学問を意味しているのである。人文、社会、自然科学の各分野において、応用面のウエイトが相対的に大きい点がその特徴となっている。

学際的分野へのとりくみも早くから行われており、本学に数多くの研究所が設置されているのもそのあらわれである。学際的研究を含め実践的研究の進展には理論的な基盤が必要であるが、本学ではこの面への対応のために文系、理系の新学部の創設や研究所の新設、さらに大学院研究科の量的・質的拡充につとめてきた。

以上述べた、本学の建学精神、教育理念、教育目標を要約すれば、「広い教養に裏打ちされた人格とチャレンジ精神をもち、つねに未来を指向した実践的な学問、実学を旨とする」ということができる。このことによっ

て、本学は深い教養と高い志をもち、社会を支える気概をもった学生を育成し、社会に送り出すことを最終的教育目標としているのである。そして、これらの教育理念・目標は、学長の入学式告辞、卒業式式辞などで反復して述べられ、また、公的刊行物を通じて教職員、学生を含む学内の構成員に対しても明示され、その浸透を計ってきた。

b 点検・評価

平成3年に改正された大学設置基準は、大綱化、カリキュラムの自由化を実現するとともに、第2条において「自己点検・評価」活動に努めることを規定し、大学の自己改革を求めている。これを受けて、本学では平成4年「近畿大学における教育・研究の現況に関する調査検討委員会」を発足させた。この委員会の審議経過をふまえ、先ず、各学部、各研究所がそれぞれの部局において、現状の調査、点検を行なうこととなった。そして、その結果は各部局からそれぞれ個別に報告されてきた。しかし、それらは各部局ごとに形式も異なり、分析の密度にもかなりの温度差があった。そこで、平成7年11月前記委員会のなかに実務委員会（ワーキンググループ）を作り、一定の形式を定め、これに沿って全学の各部局に対し平成7年時点における報告の提出を求めた。このようにして集められた各部局からの報告を、全学的視点でまとめたものが「近畿大学における教育・研究の現状と課題」と題して、平成8年に刊行された。

本学では、すでに昭和42年以来継続して「近畿大学研究業績総覧」（年2刊）を発行し、本学全教員の研究業績を公表してきた。また、各学部、各研究所において、それぞれの研究紀要や継続的な研究雑誌を発行して、研究面での自己点検に資するとともに、それらは学内、学外の情報交換の役割を果たしてきた。大学が自治を原則とし、自主的な自律性を重視する組織である以上、つねに自己点検、自己改革の姿勢を維持すべきことは当然であり、これらの作業はこのような意味において、本学ではかなり以前から日常的に行われてきたのである。しかしながら、従来からのこれらの活動は研究業績面の点検が中心であって、その客観的な評価活動には問題があり、また、教育面についてはその点検、評価は組織的には行われていなかった。そこで、平成8年における報告書の作成に当っては、教育面に重点をおいて、現状の分析、問題点の認識、改善のための課題の抽出を行なったのである。

平成8年の報告書の内容をみると、教育活動の点検に重点をおいて作業を進めてきたとはいえ、点検・評価の対象が多岐に亘るので、当然のことながら学部によって問題に対する焦点のあて方に違いがあり、指摘された課題にも距りがあった。しかし、見方を変えたとそのことはむしろ各学部の特色を示すことにもなっており各学部の真摯な教育改善への取りくみの現状を明確に示しているように思われた。

以上に述べた平成8年に刊行された自己点検報告書は、平成7年の時点における本学の研究・教育の現状を把握し、改善すべき課題を抽出したものであり、この報告書の刊行時、ここで指摘された課題がその後どのように改善されたかについて、3年後に検証することがその時点で学長から提案されていた。

この3年後の自己点検・自己評価のための全学の調査を行うに当たって、前回の調査の経験から、単なる自己点検・評価のみでなく、その評価を第3者に委ねる客観的評価の必要性が痛感され、その意味で大学基準協会の相互評価を受けることが平成11年初頭より検討されはじめた。直ちに副学長（宗像）を中心に、そのための準備・調査が行われ、平成11年11月の大学協議会において、平成12年度の大学基準協会の相互評価を申請するという学長提案が了承された。

大学、ことに私立大学においては個性が輝いていなければならない。大学の個性の形成には、種々の要因が関わる。その大学の歴史、規模、地域性、校友、教育手法等々であるが、その中で、最も重要なのは建学の精神、教育理念、教育目標である。したがって、今回の点検・評価に当たっては、建学精神にもとづいた全学レベルでの教育理念、教育目標の浸透が充分であるか否か、各学部・各研究科レベルにおける教育目標、ことに歴史の古い伝統のある学部、新しい理念のもとに設置された学部別のそれが、それぞれに十分に生かされているか否かに視点を置いた調査が行われた。本学教育の原点に立ち戻るといふ点で意義のある調査であった。

c 将来の改善、改革に向けた方策

今回の自己点検・評価報告書で指摘された様々な課題が、本学の将来発展に向けた改善・改革の推進力となるためには、具体的な改善・改革案を策定する組織体制とそれを継続的に実行する強力な組織体制が大学および各部局（学部・研究科・研究所など）に確立されることが必要である。そして、さらにこれらの体制が有効に機能するようなシステム作りを急がねばならない。

今後、本学は従前以上に教育に重点をおく姿勢を明確にすべきである。教員の意識を改革し、FD活動を広げ、教育業績評価の客観的基準を策定することに努め、評価の高い教員には積極的にインセンティブを与えるという方向に改革していきたい。

本学では、平成13年から教養部を根本的に改組する。現教養部教員は各学部、センターなどに配置換えされる。各学部におけるその後の教養教育は従来の専門教育の教員を含め、全教員が責任をもって、これを担うこととなる。学部一貫教育のなかで、本学建学の理念に沿って、教養教育の理念、目標をふまえた教育の一層の充実を図る。

未来を拓く新しい知の創造と人類の知的資産の継承という大学の不易の使命を果たすには、今後は大学院の役割がより重要になる。国立大学の大学院重点化をふまえると、私学大学院にはより一層の多様化、個性化が求められる。本学大学院は研究の高度化と研究者の養成機能の他に、高度専門職業人の養成機能の強化に特化していくことが必要であろう。

また、情報技術革命の急激な進展を視野に入れた施設、設備、教授陣についての整備・充実を全学的立場から推進していかなければならない。

大学のおかれた地域に立脚して、大学の諸設備、図書館などの地域への開放、公開講座のさらなる充実、リエゾンセンターを拠点にした企業や自治体との産官学連携等々、地域に密着した開かれた都市型大学として機能していくべきであろう。

以上、大学の理念・目的を再確認する上でも、様々な問題点・課題が浮きぼりになった点でも、また、将来への改善・改革の方向を明確にする上でも、今回の相互評価に向けた全学的取り組みは大変有意義であった。